

協働の輪を広げる、働きかけ方

地域の人々と協働で何かを始めるとき、企業や団体はどのようなことを心掛けているのでしょうか。

学校が外部と協働するうえでのヒントを探るため、
長野県松本市の銭湯と沖縄県大宜味村の観光協会でお二人に具体策やマインドについて伺いました。



CASE

1

菊の湯 (長野県松本市)

北アルプスの玄関口、松本駅から続く大通り沿いに建つ銭湯「菊の湯」は、山から流れる地下水を沸かすなど、「街と森を結ぶ湯屋」がコンセプト。地域の人々が集うコミュニティハブの機能も果たしています。湯屋チーフの鮎沢日菜子さんに、協働の価値と関わり方について伺いました。

菊の湯は100年近くの歴史をもつ老舗の銭湯だが、時代の波に抗えず、数年前に一度閉業しかけていた。しかし、「銭湯がある街の風景を残したい」と、向かいの書店兼喫茶店「栞日」のオーナーが事業を引き継ぎ、クラウドファンディングで集まった資金を元に改装。2020年に再オープンを果たした。

その際、掲げた約束の一つが、菊の湯を慕い、通っていたご近所さんにとって、変わらず心地よい場であり続けること。そのうえで、若者を含めたあらゆる世代が湯を共有し、コミュニケーションが交わされる社交場としての姿を取り戻すことだ。そのため新生菊の湯では、地域の人々との協働によって二階の休憩室を舞台に、整体マッサージやワークショップ、演奏会や上映会などが頻繁に開催されている。

こうしたイベントの企画のほか、日々の湯沸かしや掃除、番台業務を担当するのが、三代目湯屋チーフの鮎沢日

SUMMARY

〔協働の目的〕

あらゆる世代が湯や場を共有し、コミュニケーションが交わされる社交場としての姿を取り戻す。100年続く銭湯を、単なるお風呂に入る場所ではなく、街との接点を意識した人・モノ・コトが交差する場に。

〔協働する相手〕

地域の人々。常連客だけではなく、観光客や若者、親子など新たなユーザー層。企業や団体など数多くのコラボレーション先。

〔働きかけ方の工夫〕

まずは、やりたいと思ったことを周囲に話してみる。直接協力を得られなくても、適任者を紹介されたり、アドバイスをもらえたりすること。また、依頼する側・される側という固定化した役割ではなく、いつでも立場が入れ替わられるよう意識することで、関係性が持続的、発展的になる。

菜子さんだ。愛知県の大学で学び、社会福祉士として働いていたが、コロナ禍で地元へUターン。リニョールの1年後に、スタッフの仲間入りをした。「大学時代からいくつかのNPOに携わり、地域の人が集まる場所で働きたいと思っていました。なかでも、一人暮らしをしていた祖母から『風呂友がいるのよ』という話を聞き、そうした豊かな人間関係が築ける場があるのなら、続いてほしいという思いがありました」

湯上りに楽しめるイベントを多くデザインしてはいるが、必ずしも湯上りである必要はないと鮎沢さん。

「銭湯に来る習慣がない方も大勢いるわけで、足を運ぶきっかけにしたいです。そのうえで『こんな楽しい場所なら、次はお湯に浸かりたい』という気分になっていただければ嬉しいです」そんなことから始まったイベントの一つが、「菊の湯でらこや」だ。月に2回、週末の菊の湯に小学生が集まり、大学生と一緒に遊んだり、宿題をしたり、お風呂に入ったり。2022年当時、教育学部で学んでいた学生スタッフの、そんな居場所があればいいのに、というつぶやきに反応した鮎沢さんが、「いいじゃん、みんなを巻き込んでやろうよ」と背中を押したことで始まった。

「私自身がリーダーシップを発揮するというよりは、スタッフや地域のひと

の会話のなかで、『こんなこと、できたらいいな』といった声を拾い、いいねと後押しし、どうしたら実現できるか考えることが好きなタイプなんです」

開始から数年。課題は、発案者の学生スタッフが大学卒業後、誰が中心となつて継続するかだった。

「他の学生スタッフに声を掛けたものの、手伝いはするけど中心でやるのは…、という感じ。やりたい気持ちがあつて初めて活動は続くもので、どうしたものかと発案者の学生と話し合ったところ、ゼミの先生の協力で、教育学部の先輩が引き継いでくれることになったんです。菊の湯のバイトでもないのに、わざわざボランティアで来てくれて大変ありがたいです。将来的には、今、て

らこやに来ている小学生たちが大学生になったとき、手伝ってくれるような循環が生まれると素敵かなって」

「おやこ菊の湯」という人気の企画もある。小さい子を抱える親御さんが、のんびり湯船に浸かれるよう、男女それぞれの脱衣所に、お子さんの着替えや入浴を見守るボランティアを配した定例イベントだ。

「親子という新たな客層に来てもらう目的もありますが、ご近所との繋がりが希薄で、子育てが孤育てになりが



KIKUNOYU

女湯

男湯

この方に聞きました

菊の湯 三代目湯屋チーフ
鮎沢日菜子さん

あいざわ・ひなこ ● 1994年長野県生まれ。総合学科高校で福祉の世界を知り、愛知県の日本福祉大学に進学。在学中、福島の子どもの支援などボランティア活動を積極的に行う。卒業後、福祉系のNPOに勤務したのち長野県にUターン。書店兼喫茶店「菜日」や、銭湯「菊の湯」を経営する株式会社菜日に転職。湯屋チーフとして、湯沸かし、掃除、番台業務のほかマネジメント業務にも携わる。





老若男女がくつろげる量敷きの広々とした二階休憩室。左の棚は、登山用リュックも入る大型のロッカー。リノベーションには信州大学の学生も関わった。

念をもって続けていけば、賛同者が現れるんだって、力を頂きました」

地元の高校生や教員の「やってみたい」も応援する

こうした活動によって、「菊の湯」銭湯」という認識から、次第に「お風呂もある、面白いことができる場所」と認知されはじめ、外部からもさまざまな企画が持ち込まれるようになった。「銭湯好きの高校生から、探究の授業の一環で、石嶮づくりのワークショップができなにか相談されたこともあり

ちな育児状況もあるなか、社会福祉士である私の課題解決の一方策にもなっています。そんな思いが伝わるのか、あるお母さんから、『私も、こうした子育てに優しい場所をつくりたいと思うていました。今は育児で忙しく、一緒にやることは難しいけど、落ちついたら何か活動したい』と言われたことも。信

ます。同級生の多くが銭湯体験がないことを知って驚き、銭湯の魅力を伝えたいのです。知り合いの大人を講師に、宝石のようにキラキラした石嶮をみんなで作り、その後銭湯の見学ツアーを行うというユニークな内容で、企画から告知までその生徒が中心になって行い、二度開催しました」まさに、高校生の「やってみたい」を後押しした形だが、何でもかんでも引き受けるわけにはいかない。どういうケースであれば断っていただろうか。

「『課題なので仕方なく』という様子が垣間見えたら、『自分の気持ちをよく考えてから、もう一度来て』と言っていたかもしれません。ただ、私も学生時代、周囲の大人に応援してもらっていたわけで、時間が許す限り、教育や子育てをサポートしたいと思っています」

教員が、こんな依頼に来たこともある。「最近も県内ニュースで取り上げられていましたが、長野県では、学校の先生が地域の企業で数日間、職場体験をする研修制度があるそうなんです。受け入れ先は自ら開拓する必要があります。一昨年、菊の湯と栞日に、研修

を依頼してきた工業高校の先生がいらっしゃいました。生徒の就職に関係ありそうな工場などではなく、自分が知らない職場を体験したかったそうです。私にとつても、学校の先生はどんな職業なのか興味があり、2日間一緒に働くなか、やりがいや悩みなどの本音が聞けて楽しかったです」

まずは周囲に話してみる そこから始まる新たな可能性

地域のさまざまな人々と協働の輪を広げている鮎沢さんに、働きかけ方のヒントを聞いてみた。

「やりたいことがあるなら、漠然としていても、まずは周囲に話してみることはできないでしょうか。最初から協力を依頼するのではなく、『こんなことを考えているけど、どう思いますか』くらいの聞き方にとどめ、①『面白そうだね』と言われれば『一緒にやりませんか』と誘いやすいし、②『自分は興味ないかな』と言われたら『興味ありそうな方がいたら繋いでもらえませんか』と頼めばいいし、③『それってうまくいくの』という顔をされたら、問題点はどこかを教えようということができると思います。

あと、経験上、『主催者と参加者』『助ける人と助けられる人』など立場が固定化した関係性に違和感をもっていました。おやこ菊の湯のエピソードの

ように、今は『手伝ってもらう側』だけでなく、次は『手伝う側』にも回れるような関係を意識的につくることで、『コミュニティは発展するし、持続可能になると思うんです。例えば菊の湯には時々、『定期演奏会の協賛をお願いします』などと高校生や大学生がスポンサーを募りにきます。そんなときは、『どんな思いで実施するの？ 誰に来てほしいの？』と聞くとともに、菊の湯のパンフレットを渡して、『こんなイベントを企画しているから部活のみんなで来てね』と付け加えるようにしています。応援する側とされる側の関係で終わってはもったいない。その先まで意識して、良い関係を築いていきたいと思っています」

取材後記

二階での取材中、「玄関前に暑くてバテ気味のおばあちゃんがいる」という、子どもたちの呼びかけにすぐに反応した鮎沢さん。オープン前のロビーでその方の話を聞き、休ませてあげていました。困ったときは支え合おうという、地域本来の豊かな人間関係が、菊の湯の周辺にはありました。

学校が外部の人と協働で何かを行うとするとき、「失礼があつたら」「迷惑ではないか」と気後れしそうですが、地域には、若者の成長に協力したいと考える大人が少なからずいることを素敵だと思いました。

手伝ってもらう側が今度は手伝う側に。 そんな関係がコミュニティを豊かにする